世紀を越えた103年目の臨海実習

椿本昇三
人間総合科学研究科助教授

筑波大学体育専門学群の水泳実習（臨海）は、今年の夏に103年目の授業を行った。この集中授業は、名実共に日本一の歴史を誇るものである。明治時代（1902年）に始まる水泳教育は、当時の嘉納治五郎校長先生の四方を海に囲まれる我が日本国においてその国民の生命を守るべき水泳教育の重要性を提唱されたことによる（茗水百年史, 2002. 筑波大学体芸図書館蔵）。

明治時代には、プールは最も貴重な運動施設であり、全国に僅かしか見ることができなかった。そのため、水泳の授業は、自然の川や海などで、古式泳法（日本泳法）の指導方法を利用しながら行われた。特に、高等師範学校の泳法として、「水府流太田派」が生まれ、現在まで、千葉県館山市富浦町の筑波大学付属中学校寮で脈々と引き継がれてきている。この泳法の特徴は、各流派の優れた点を取り入れた合理的な泳法と言える。

当時から今日に至るまでの代表的な授業風景が、下記のようなものである。それぞれの時代背景をうかがい知ることのできる貴重な写真である。

写真1（大正初期）

写真2（昭和25年）

写真3（平成14年）

さて、それでは現在の筑波大学の水泳実習（臨海）の授業について簡単な説明をする。

授業目標は、図1のような、4つの大きな目標を持っている。

1. 自然の海での水泳能力の向上
2. 水中安全教育を理解し、救助・救急法を学ぶ
3. 海を通して自然環境への理解を深める
4. 集団生活を通して社会性・協調性・自主独立・リーダーシップ・フォローアーシップなどを学習し、また仲間作りや友好を深める体験をする

これらの目標は、学内のキャンパスでは得がたい授業内容である。学生にとって4年間で、唯一の学外での集団共同生活の授業である。筑波大学体育専門学群のカリキュラム中でも全学群授業として位置付けられるユニークな授業である。

また、本学の授業内容は、全国の体育系大学へ強い影響力をもっていることから、日本の水泳実習のリーダーとしての自覚を持ち、実習内容に関しては常に、時代のニーズや社会環境の変化に対応して「水泳教育の意義（水中での生命保持）」を追及してきている。

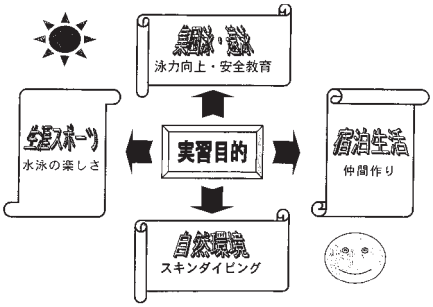

図1

今後更に、新たな時代を築くためには、授業改善に取り組み、日本最古の歴史を持つこの授業をどのように発展させていくかを考える必要がある。先人の築いた歴史の重みを感じながら、微力ではあるが、常に時代の先駆者としての地位を保つための努力をすることが重要である。筑波大学が日本に誇る授業のナンバーワンの一つとして、その自覚を持ち責任を果たすために、授業の発展に強く取り組んでいきたいと思っている。

興味・関心を持たれた方は、是非、図書館の茗水百年史をご覧下さい。

（つばきもと　しょうぞう／水泳研究室）